

=====

GCOE NewsLetter

[No.48 2011/9/29]

2011年度第2回大学院生海外派遣事業について（再掲）

gCOE後期の開講科目について

次回のオープンレクチャーについて

2011年度第1回gCOE論文賞の審査結果

「テキスト布置解釈学原論」の要約

gCOE第12回国際研究集会の概要

=====

■ 2011年度第2回大学院生海外派遣事業について（再掲）

2011年度グローバルCOE「大学院生海外派遣事業」の第2回募集をします。

募集期間：2011年9月28（水）～10月4日（火）16時半必着

第1次審査結果発表予定：2011年10月14日（金）

第2次審査結果発表予定：2011年10月21日（金）

■ gCOE 後期の開講科目について

gCOE 後期の開講科目は以下の通りです。

【各論】

各論 I（水 3 限：128 講義室）

佐藤彰一特任教授、森際康友教授、大石和欣准教授

各論 II（月 5 限：共同 2A）

重見晋也准教授、古尾谷知浩准教授、クレール・フォヴェルグ特任准教授

各論 III（木 4 限：129 講義室）

釘貫亨教授、加納修准教授

各論 VI（火 4 限：128 講義室）

ブライアン・カレン准教授（名古屋工業大学）

【原論】

原論（集中）（129 講義室：2011 年 12 月 27 日、2012 年 1 月 5 日、6 日 [2～5 限]、10 日 [2～4 限]）

松澤和宏教授

【共通科目】

博士課程前期課程学生用共通科目

テキスト布置解釈学概論（木 6 限：127 講義室）

加納修准教授、クレール・フォヴェルグ特任准教授

gCOE の Web ページにも掲載しています。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education02/>

■ 次回のオープンレクチャーについて

2011 年 10 月 19 日（水）18：00～

名古屋国際センタービル 15 階 グローバル COE オフィスにて

講演者：大石 和欣 准教授（名古屋大学大学院文学研究科・英文学）

題目：「ロマンティック・パロディーとテキスト布置」

■ 2011 年度第 1 回 gCOE 論文賞の審査結果

グローバル COE 論文賞へのご応募ありがとうございました。

選考委員会での審議の結果、平成 23 年度第 1 回 gCOE 論文賞に次の論文を顕彰することになりました。

受賞者：佐々木 稔

論文タイトル：L'apparition du Spleen moderne—— les représentations du chien et de la mort

【講評：松澤和宏（研究担当サブリーダー）】

ボードレールは、詩集『悪の華』の刊行 6 年前の 1851 年に、11 篇の詩を収める小詩集『冥府』を発表した。本論文は、ボードレールがそこではじめて「憂

愁」 spleen という語を使用したことに着目し、それまでに詩人が用いていた「憂鬱」 mélancolie とは異なる独特の意味合いを、社会的歴史的な文脈を重視しながら究明しようとしたものである。論者は、この詩集が掲載された「議会通信」紙の政治的性格、詩のなかで用いられている「犬」や「死」などの表現が当時の読者に喚起したであろうイメージ、後年の『悪の華』との異同（とりわけ「犬」が「猫」に、「年老いた詩人の影」が「年老いた詩人の魂」に書き換えられた点）等を綿密に検討することを通して、民衆と 1848 年の 2 月革命と 6 月暴動、コレラの記憶、それらの舞台としてのパリという表象が浮かび上がってくることを説得力をもって明らかにしている。こうして『冥府』における「憂鬱」という語のもつ社会的政治的な意味合いを、その創作の時点の文脈に寄り添いながら丹念に明らかにした点で本論文は高い評価に値する。「憂愁」に関連する悲観主義的な一連の語彙の微妙なニュアンスの嬖に分け入る研究が、ボードレールの詩的世界の現代性 や政治的社会的な文脈との関連で、今後いっそう深められていくことが期待される。

■ 「テキスト布置解釈学原論」（講義科目）の要約

MORIGIWA Yasutomo (2011 年 6 月 9、16 日)

On 9 and 16 June, 2011, Professor MORIGIWA Yasutomo gave two lectures on the general characteristics of textual interpretation. The first lecture explained why the so-called “linguistic turn” in philosophy was a breakthrough in modern philosophy. By shifting the focus from consciousness to language, what was hidden in the two-termed epistemic scheme of a subject knowing something about the object became apparent. The missing third term was language, the medium that transmits information from the speaker/writer to the hearer/reader. The hearer/reader becomes part of the integral scheme of knowing. Knowing involves expressing knowledge. Contrary to intuition, the “Ah-ha Erlebnis” is an incomplete part of the activity of knowing. A new way of looking at the phenomenon of knowledge is thus introduced.

The second lecture introduced Prof. MORIGIWA’s theory of interpretation and legal interpretation as developed in the book that grew out of a GCOE international symposium he had organized and held at the École Normale Supérieure in Paris: *Legal Interpretation in the Age of Enlightenment* (edited by Morigiwa Yasutomo, Michael

Stolleis and Jean-Louis Halpérin, Dordrecht: Springer, 2011). His paper, called “Interpretation by Another Name,” argued for interpretation as augmenting knowledge. Interpretations are of something. In the case where the object of interpretation is the text, the literal meaning of the text provides some ground of constraint for the range of possible interpretations. How is this possible? Analysis of the practice of interpretation makes clear how the establishment of the *identity* of the text, the object of interpretation, and the *change* of its interpretation are simultaneously possible. When the theory is applied to legal texts, it can explain how “that which makes the *identity* of the object of legal interpretation possible, gives *authority* to the law; that which makes *change* possible in law brings about *justice* according to the law” (p. 125, italics added).

■ gCOE 第12回国際研究集会の概要

「歴史におけるテキスト布置」 Configuration du texte en histoire

2011年9月1日（木）～2日（金）、名古屋大学（野依記念学術交流館）にて開催。

コーディネーター：加納 修（名古屋大学大学院文学研究科准教授・西洋史学）

グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」は、平成23年9月1日（木）、2日（金）に野依記念学術交流館において、フランス、ドイツ、アメリカ合衆国で活躍する歴史家5名を招いて、「歴史におけるテキスト布置」をテーマとする国際研究集会を開催した。

佐藤彰一拠点リーダーによる挨拶で幕を開けた研究集会初日は、西洋中世の歴史叙述・聖人伝史料に焦点を合わせた三つの報告が行われた。パリ・ソルボンヌ大学のミシェル・ソー氏は、アインハルトが著した聖遺物奉遷記を取り上げ、序文や構成や語りに注目することで作者の執筆方法の独自性と作者を取り巻くコンテキストを明らかにした。プリンストン大学のヘルムート・ライミッツ氏は諸事情ゆえに来日できなかったが、発表原稿を準備してくれた。カロリング期の歴史叙述抜粋集という複数のテキストからなる「テキスト」の社会的論理を実証的に読み解く試みは、近代的なテキスト理解の再考を促す刺激的な報告であった。立教大学の小澤実氏は、『ハンブルク大司教事績録』の一部をなす司教ウンニの伝記が作品全体のなかで果たした役割を、著者の戦略と絡めながら、明快に浮かび上がらせた。

2日目の午前中は中世初期の法テキストを対象とした。加納は、国王証書の一

類型をなすデナリウス方式による解放証書が、国王証書全体のなかでいかなる位置を占めていたかを検討した。ベルリン自由大学のシュテファン・エスター氏は、「教会における奴隷解放」に関するコンスタンティヌスの立法が中世初期の法テキストでどのように用いられたかを検討し、コンテキストに応じてその内容が変えられながら、権威として利用されつづけたことを明らかにするとともに、このような前テキストの利用が中世初期社会にとって有していた根本的な意義を強調した。東京大学の菊地重仁氏は、写本における形態と配置を調査することで、カピトゥラリア・テキストならびにそれを取り巻く文化的・制度的コンテキストの特殊カロリング的な性格を明らかにした。

午後の最初の二つの報告では、社会経済史でしばしば用いられる史料が扱われた。名城大学の西村善矢氏は、中世盛期トスカナ地方の地代リストの形式と内容を調査し、地代リストが二種類に分類できること、そしてこの区分が社会経済的コンテキストに対応していたことを明らかにした。弘前大学の足立孝氏は、ウエスカ司教座聖堂のカルチュレールと証書原本を調査し、索引付きの証書集への収録と原本の形態での保管の違いが、ある家門が自己を再構築するための戦略に由来する可能性を指摘した。続いて行われたパリ西大学のフランソワ・ブガール氏の報告は、聖ペトロの名で書かれた教皇ステファヌス2世の書簡を、活喩法の観点から考察した独創的な研究である。当時の政治的コンテキストだけでなく、近代に入ってからこの書簡の解釈、古代的な修辞法の変遷など多岐にわたる重要な側面に論及し、まさに研究集会のテーマに即した報告であった。掉尾を飾ったパリ・ソルボンヌ大学のイヴ・サシエ氏の報告は、12世紀初頭に成立したある政治論考における引用の仕方に着目したものである。著者のユーク・ド・フルリーが、カロリング期の著述家とは異なり、権威となる作品を引く際に、決して名前を挙げることなく、自分の議論に組み入れていることを論証し、この作法が叙任権闘争という当時のコンテキストと関連していたことを証明した。

甚大な被害をもたらした台風12号の接近のため、参加者数は決して多くはなかったものの、各報告後には活発な議論が交わされ、実り豊かな研究集会となった。(加納 修)

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2011 年 10 月下旬 を予定しています。

.....

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.48

発行：GCOE 編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2011 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

•

..... •